
失恋か、初恋か？

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋か、初恋か？

【Nコード】

N1695R

【作者名】

mine

【あらすじ】

「蘭が好きなのは……本当にあのガキンチョなの！？」 組織も潰せず、高校2年生になったコナンは、帝丹高校の教師となる蘭に新一として久々に電話をかける―だが、蘭には好きな人が他に出来たらしく……

カップリングは中盤までコ蘭↓終盤新蘭です。

電話

あれから、もう10年が経つ…

だが……また、この姿で桜の季節はやって来た。

コナンは今年で高2、蘭は今年から初めて高校の教員となる。
そして、その高校は……

「へー…蘭姉さんも帝丹高校なんだ。」

呼称も、「姉ちゃん」から「姉さん」になった。これは蘭からの指摘で、「何だか姉ちゃんと呼ばれると少し恥ずかしいから…」と、中学に入った時に言われたのだ。

綺麗な笑みでコナンの方を向く。

「うん。そうよ……初めて担任にもなるから、コナン君と一緒にクラスを担当になるかもね♪」

本当に強い女性だ。大切な人が、もう戻って来ないかもしれないのに、ただただ待ち続けている。心変わりもせずに……

前回新一が電話したときも……と言っても2年前だが蘭は元気に答え、最後に「好きだよ。ずっと、ね。」とまで言ったのだ……だが、その新一はまだ組織と戦っている。

（まっ……後で蘭にも電話掛けてやっか……「新一」として、な。）

~~~~~

コナンは家に着くと、「事件に行く」と言い残し、家を出た。高校生探偵として、名前こそ組織にバレる危険性があるため広まってはいいないが、目暮などの各警察関係者には信頼されていた。だが、この日はそれはただの口実である。

コナンはその後少し離れた電話ボックスに入っていた。今は新一の携帯が壊れているため、こうするしかない。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

プルルル……

ガチャ

「はい。毛利探偵事務所です……」 「よお。蘭。久しぶり。」

2年振りの電話―また蘭が泣いてしまいかもしれないと新一は思ったのだが、意外と元気に蘭は返した。

「ふふつ、久しぶり。新一。」

だが、いつもなら「ちょっと！今何処にいるの！？」とでも蘭は叫ぶのだが……

「蘭……何があつたんだ？そんなに嬉しそうにして……」

新一がそう聞くと、電話越しの蘭の表情が変わる……新一にも伝わってきた。

「実……を求め……」

何か、小さく蘭は呟いた。

「え……」

コナンには聞こえていない。

「ねえ、新一……」

「え？」

「私……本当は……」

好きな人、いるんだ

「……そうか。」

勿論、否定はしない。

「ごめんなさい……新一。本当は、あの時もそうだったの……でも、

その人も家の中にいたから、ちよつと言えなくて……」

「いいさ……オメーだって、10年もすれば好きな奴が他に出来る  
だろうよ。……で？誰なんだ、そいつ……」

「新一も知ってるよ。」

「知ってる……か。……知り合いくらいなら新出——」

「うっん……私ね……コナン君が好きなの。」

（成る程。あいつは優しいし、「俺ほどじゃねえけど」推理力もあるし……蘭にはピッタリかもな……）

「——って！えっ——！」

「それじゃあ、またね。」

蘭は、辛そうな声をしながら、電話を切った。

「ちよっ……」

コナンの耳元に響くのは、夜の町の騒ぎと、一定間隔で繰り返される嫌な音だけだった。

## 蘭の想い

失恋した。俺は。

間違いなく、もう蘭は待つてはくれなかった。

10年という時が、限界を作り上げてしまったのかもしれない。

だが、代わりにコナンは初恋を手に入れた…いや、手に入れてしまった。

蘭は…気付いたら、本当にコナンの事が好きになっていたのかもしれない。

確かに、10年の違いはあるが、その程度なら何とか跳ね除けれそうだ。

勿論、コナンの姿でも俺は蘭の事が好きだから、このまま数年後には結婚だって出来るかもしれない…

でも、いいのだろうか？

このまま、俺も蘭を好きにいいのだろうか？

そもそも…戻らなくちゃいけないのは俺なのだが、蘭の本心は、いつまでもコナンを愛してくれるだろうか？

やはり、工藤新一が愛しくなるのではないか？

そして本当に蘭はコナンの事が好きなのだろうか？ただの出鱈目で

は無いのか？

尽きない疑問の中、俺は家へと歩を進めた。

―新しく、蘭が借りた…マンションの一室へと。

~~~~~

ガチャ…

「あ、コナン君！お帰りー！」

「う、うん…只今。蘭姉さん。」
とても、20代後半の女性が、高校生に向けて放つ言葉とは思えない。

「そうそう、今日はコナン君の大好きなハンバーグだから…」
「ほ、本当？ありがとう…蘭姉さん。」

だが、直前にあつた出来事を考えれば、何とも言い難い。

「あつ…いけない。ねえ、コナン君？」

「な、何？」

「お父さんにこれ届けてくれないかしら…落としていった競馬の券…今、大丈夫？」

今は、毛利探偵事務所とその上の階には縁を取り戻した小五郎と英理が一緒に住んでいる。

そして数日前に、小五郎と英理は蘭の就職祝いに来ていた。

…その時までも、競馬の事を考えている事には、コナンも少々呆れるのだが。

「う、うん。大丈夫だよ。」（…それに、今ここにいと…何だか気分がモヤモヤする…）

しかし、蘭はさらに付け加える。
「絶対に早く戻ってきてね。」

「う、うん。それじゃあ、行ってきます。」
「行ってらっしゃい…」

ガチャ…

ドアを閉めると、その場でコナンは溜息をついた。

（やっぱり…蘭の想いは、俺に向いてるのか？）

一人にしないで…

両想いーお互いが相手の事を想い合い、恋愛感情を感じる状態、または関係の事を指す……とても言うておこつかしら。

『コナン君は……蘭お姉さんの事が好きなのよ……絶対。』

今なら、良く分かる。

コナン君は、私の事が本当は好きだったんだ。

「新一」という単語を口にする度に、少しコナン君の表情は変化してた。

ー意識してたんだ。

…今なら、もう大丈夫だよ？

コナン君も、今は別れた新一と同じ高校2年生…そろそろ、コナン君から言っても、私から言ってもいいよね？

…でも、絶対にいなくならないで。

絶対に…お姉さんからの…いいえ、恋人としてのお願い。

新一のように推理にのめり込んで、いなくなったりしないで。

そう…

一人に、しないで…

~~~~~

ガチャ

「おじさん？」

「コナンがドアを開くと」

「おお、コナン。どうかしたか？」

「お邪魔します」と一言言っ、靴を脱いで中に入る。

「これ、おじさん。この前来た時に、落としてったでしょ？」  
「はい」と言っ、競馬の券を差し出す。

「おー…ありがとな。無くて困ってたんだよ……ところで」

話がいきなり変わる。

「蘭はどうだ？相変わらず元気でやってるか？」

小五郎の表情が陰しくなる。

親としての、心配なのだろうか。

結婚相手もいないまま、こうして蘭は27まで来てしまった。

何度も新一を捨てての結婚を小五郎は「さりげなく」勧めたが、「新一を待つ」の一点張りの蘭に敵うはずは無かった。

だからこそ、蘭が孤独感に苛まれないよう、しっかりしているコナンに、蘭を守るように期待をかけているのだ。

いつか、新一が戻ってくるか、蘭が諦めて別の信頼できる男を選ぶ…その時まで。

― 勿論、現状…蘭がコナンを実は想っている事を知らない小五郎だから、そう考えるのは不自然ではないのだが。

「う、うん。元気だよ。明日が始業式だけど…凄く張り切ってたよ。」

小五郎は、ほつと安堵の顔を浮かべる。

「そうか。それは良かった……そういえば、そろそろ英理も帰ってくる頃か。」

「そ、それじゃあ、僕は帰るね。蘭姉さんが待ってるから。」

「そ、そうか。それじゃあな。元気でやれよ!」

「うん!」と小さく返して、コナンは家を出て行った。

~~~~~

ガチャ

「ただいまー…あれ？」

夕食が…俺の分しかない？

蘭は…

いない。

「蘭姉さん？」

呼んでも、反応が無い。

（おつかしーな…夕飯は出来上がってるみたいだし…温かいからそれほど出来てから時間は経ってないはず…ん？）

ふと、蘭の自室の方に目をやる。

（その中かな…）

ゆつくりと、部屋の前まで近付いた。

「蘭姉さん？」

しかし、やはり反応が無い。

「まったく…どこ行っただ…？」

仕方なく、席へついて、コナンは夕食を食べ始める事にした。

（相変わらず…おいしいけど…）

『うつん…私ね…コナン君が好きなの。』

（……………）

その言葉だけが、頭を駆け巡り、思考を妨げる。

（明日もこんな調子じゃ、な……もう寝るか。今日は……）

そのままコナンは夕食を一気にかきこむと、風呂にも入らずに寝てしまった。

一人にしないで…（後書き）

蘭の行き先は…？

いつも…

「蘭、おめでとう。」

「園子…ありがとう。それじゃあ—」

「「乾杯」」

カン、と軽くグラスを打ち付ける音。

丸つきり忘れていた。

—今日が、園子と会う約束をしていた日だった事を。

3週間ほど前から約束していて、今日コナン君が出てっってから、夕食を作っている間に思い出した。

コナン君には置手紙を残しておいたし…テーブルの上だから気付くと思うけど。

…ちょっと待って。じゃあ、どうして私はコナン君の分しか作ってなかったのかしら？

今日、園子と会う事に気付いてなかったなら、2人分作ってるはずよ…

…ま、いつか。結果オーライだし…

「ねえ、蘭。新一君からは最近連絡は無いの？」

ほら、またこの質問ね。
会う度に、会う度に。

何で…皆は…

そう、いつも…いつも…

「どうしたの、蘭？」

はっ
…

「え？」

「いや、いきなり動かなくなっちゃったから…」

…疲れてるのかな。

…うつん。違う。

「ちょっと、疲れてて。」

「無理しちゃダメよ、蘭。この前、お父さん3日間寝込んで
…大変だったんだから。」

……そう。

「うん。分かった…」

「それで、どうなの？ 新一君は…」

もう、言っちゃおうかな。

「私ね、新一と別れる事にしたんだ。」

「……えっ!？」

~~~~~

素っ頓狂な声を上げた園子…それもそのはず、何年間も遠距離恋愛を続けてきた彼女が、しかも上手くいった関係だったのに、いきなりその相手と別れたというのだから。

「ちよっ…冗談きついよ、蘭。」

「…冗談じゃないよ。私、本当に好きな人が出来たから………新一よりも、大切な人。」

だが、よくよく考えてみれば不思議でもないのかもしれない。たった一つのきっかけで、こういう事は移り変わっていくものだし、そもそもここまで新一にほったらかしにされていれば、いつか突如限界がやって来ても可笑しくはない。

「…そうなんだ。でも、後悔してないんでしょ？」

もしも、蘭に後悔がなければそれでいい―親友としての、気配りだった。

「…うん。勿論よ。新一よりも、絶対にずっと好きになれるから…すぐ近くにいるし。」

この時、ふっと新出先生の姿を園子は脳内に思い浮かべる。会う気になれば、いつでも会えるという環境の方が、やはり蘭にとっても良いのかもしれない。

「そっか…新出先生ね。」

「違うわ…園子も、よく知ってるでしょ?」

(…え?)

次の一言で、園子の思考は凍りついた。

「―コナン君よ。」

それと同時に、蘭の自宅の冷蔵庫の下に入り込んでいた紙が、窓から入ってきていた微風で僅かに外に姿を見せた。  
―コナンはとつくに寝てしまっていたが。

本当に…？

え？

『コナン君よ。』

え？

『コナン君よ。』

…あれ？

「どうしたの、園子。私なんか変な事言っただ？」

…言ったも何も…

「園子？」

「…本当に？」

「え？」

「蘭が好きなのは……本当にあのガキンチョなの！？」

…どういう事？

それじゃああなた達…

「そうだけど…そんなに变かな？」

「变よ！だって…まず、10歳も離れてるし―」

「大丈夫だよ…コナン君、高校生にしては凄くしっかりしてるし…  
あんまり年の差感じないし。」

…

「でも、どうして…？あのガキンチョの、何処が好きになったの？」

そうよ…あのガキンチョが持ち合わせてるのは一体何？

あんなマセガキを…愛するって言うの？

「うーんとね…まず、新一に凄く似てるでしょ？推理してる姿も…  
どんだん、新一みたいになって来て…どんだん、大人びてきて…い  
つもいつも、私はコナン君に…何回も、何回も助けられて来て…い  
つの間にか、心の中で新一より大きくなってたんだ。コナン君が…  
…」

……変わったのね。蘭も…

でも……

「でも…蘭の言ってる『新一君』は、まだ高校生<sup>・</sup>の姿なんでしょ？  
高校3年生の冬に、帝丹大学に出席日数が足りないにも関わらず進  
学させてもらえるつてのに…断って、いなくなつたあの『新一君』。  
電話で何度会話してたとしても、蘭が言ってるのは…『高校生の新  
一君』だよな？」

そうよ…今の新一君の姿が、蘭は分かってないだけ…

「……」

ちよつとキツいけど…ちゃんと言っておかなくちゃ。

…じゃないと…あのガキンチョだつて後々困るじゃない…

「ただ、蘭は新一君の代わりとしてコナン君を立てているだけじゃ  
ない…そうで—」

「違う!」

「…え…」

珍しく、大きな声を蘭は張り上げていた。

あの事件の時から…

「そんなはず、無い！」

自然と蘭はテーブルに、拳を叩きつけていた。

「…私は、コナン君が好きなの。辛い時…苦しい時…悲しい時…寂しい時…私の感情が、負の方向に傾く度に、いつも助けてくれたコナン君が、純粋に好きなの——一番私が好きなのは、絶対にコナン君よ！」

強く言い張る蘭。

「で、でも、ねえ…」

だが、信じられるだろうか？居候している少年の、お姉さん役だった人間が——その少年を愛してしまうだなんて、考えられるだろうか？

「じゃあ…園子は、園子は今の新一が分かるの？」

「そ、それは…」

勿論、知っているわけがない。

「知らない、でしょ？…もういいよ。私。あんな奴……人を振り回して、今日も何処かで嘲笑ってるのよ…新一は。」

「蘭…」

何も知らない…いや、知る事の出来ない彼女には、こう思う事しか出来なかった。

~~~~~

『お帰り。コナン君。』

蘭……か？

『夕ご飯は、コナン君の好きなハンバーグだよ!!』

ああ、丁度10年前……

『やったよ!!コナン君!!優勝よ、優勝!!』

高3の…最後の夏だよな。あん時は…凄かったよな。

『私、空手極めようなんて…思わないよ。このまま、ずっと新一を待つ。そう、ずっと…』

海外留学まで考えさせられた時に…断ったんだっただよな。

…でも、俺は…

『5個目…良かった…これも、全部ずっと、ずっとコナン君が応援してくれてたお陰…本当にありがとう。』

大学も…そのまま4連覇だったっけ…ははっ…凄すぎたよな。お前…そのうち、オメーは空手部の顧問になるのかも…な。

『まだ…待つよ。新一。』

…4年前…か…

『違うわ…コナン君よ。』

……………昨日。

『ありがとう…コナン君、守って…くれて…』

…っ！

これは…あん時か…2年前…くそっ…

「あらー工藤新一君…」

なっ
…

「ふふっ
……」

くそっ… 牢獄から… 抜け出しやがったな!!

「その通りよ… でも、あなたを殺したら… もう二度と捕まらないわ。
」

こいつ… 自分まで… くそっ!!

「もう時間もないわ… 彼女も来るし。それじゃあ—さよなら」

パァン

「うわあああああああ!!……!!……!!」

はっ
…

~~~~~

時計を見やる。まだ…5時半。

「夢…か…」

大量の汗がしみ込んだ枕を見て、コナンは胸をなでおろす。

（あんな奴…二度と…ん？）

コナンの頭に、何かが引つかかって…外れなくなった。

（そつえば……そうだ。あの事件の時から…）

あの事件の時から…（後書き）

この事件が、キーワードの一つです。

## 自然な流れ

目覚ましが鳴る前に、自然と目が覚めたのは――1ヶ月振りくらいだった気がする。

「おはよう、コナン君…昨日はごめんね。園子との約束あったの忘れてて…テーブルの上のメモも落としちゃってたみたいで…」  
「ううん、気にしないで。」（園子との約束だったのか…）

自分で作った弁当を包み、水筒と共にバッグの中へと入れる。  
テーブルの上には朝食が大体並んでいた。

「手伝うよ。」

「ありがとう…コナン君。助かるわ。」

ご飯を盛った茶碗をいつものように2つ、自分で運んで行く。  
その間に、蘭は焼き魚を皿に乗せる…

―テキパキと、作業は進められた。

「…いただきます。」

―朝、これを二人が欠かすのは年でも数えるほどだったと思われる。  
あくまで、それは自然な流れで毎日、平然と行われた。

その日一日の事を、楽しく話しながら朝食を食べる…それだけで、蘭は勿論の事、コナンにとっても幸せだった。

だが、この日はコナンの方が静かだった。

「…コナン君？」

「な、何？蘭姉さん…」

「…うつん、なんでもない。」

言おうとしたが、言葉は蘭の喉を通らなかった。

「ごちそうさま。」

「ごちそうさま。」

二人はほぼ同時に食べ終わった…蘭が意図して遅くしているのか、逆にコナンのペースに合わせて早くしてるのか、それがコナン側なのか、はたまたただの偶然なのか―どれかは全く分からないが。

こうして、自分の部屋で手早く着替えて、一緒に出かける―当たり前のように自然な流れだった。

―だが、コナンはこれが嬉しかったし、逆に拒みたくもあった―昨日のあの言葉を聞いたから。

『うつん…私ね…コナン君が好きなの。』

―公共の前でべとついて来たりはしない。そういう人間ではないから。

―だが意識はしてくる。簡単にそついう感情を完全に隠し通せるような人間でもないから。

複雑な心境の中で、前にいる蘭を追うようにマンションの階段を下りていった。

~~~~~

今、コナンは2年B組のドアの下。

―まさか、またこの教室になるとは…思いもしなかった。

ガラッ…

「おはよう、コナン君。」

「お、おはよう。歩美ちゃん…あれ、他は皆まだか？」

「そつみたい…」

高校生になって、流石に学校に一緒に行く事は無くなった…無くなったが、『少年探偵団』は『探偵クラブ』へと名を変えて、現存していた。

―発案は歩美で、元太に強制されてコナンも灰原も入れられる羽目となった。

勿論、やる事は校内での落し物探索など、あくまで校内レベルにとどまっではいるのだが。

「おはようございますー！」

「おっ、コナン！もう来てたか！」

そうこうしている内に、元太も光彦もやって来た。

―偶然にも、今年も5人全員同じクラスらしい。

「元太、光彦…あれ？灰原は？」

「えっ…灰原さんなら、さっき教員室に行きましたけど…」

~~~~~

…偶然にしても、程がある。

―絶対に、嫌だったのに…毎日、顔を合わせなくちゃいけないなんて…

―絶対有り得ないという確証が欲しくて、いつものように今年の担任を読み上げるあのいい加減な教頭の机の上を見た。  
絶対に、去年同様紙が置いてあると思って…

結果は、半分外れで半分当たり。

置いてあったけど…

『2年B組担任：毛利蘭』

もう片方の予想は外れた…みたい。

## HR（ホームルーム）

チャイムが鳴り響いて、数分後―ゆっくりと、担任が部屋へと入ってくる。

（あっ…）

思わず、クラスの半数弱が声を上げそうになる。

―蘭だ。

「えっと…初めまして。今年1年間、この2年B組を担当する毛利蘭です。漢字は…」

黒板に、大きく自分の名前を書いていく。

「はい…初めての担任なので、分からない事も沢山あると思います  
が、どうかよろしくお願いします。」

大きく礼をすると、クラス中から拍手が沸き起こった。

「それでは、出欠を取ります…江戸川コナン君。」

「えっ!」と、上の方の番号をチェックしていなかった生徒数名が驚く。

「あ、はい。」（しかし…驚いたな。「あ」から「う」まで誰もいないなんて…結構珍しいんじゃないか?）

返事が返ってくると、蘭は口元にうっすらと笑みを浮かべて、次々と名前を呼んで行った。

HR終了後、クラス内では蘭の事を小学、中学校時代から知っている者達によって噂が広められていた。

「眠りの小五郎」の娘であるという事、コナンと蘭が一緒に住んでいる事、空手の達人であるという事……

探偵団が話すまでもなく、噂は広まっていた。

だが――その噂を一番気に留めそうな男は、クラス内には残っていなかった。

~~~~~

「―でも、助かったわ。色々教えておいてくれて…ふふっ、それにしても偶然よね…探偵団皆、一緒のクラスだなんて…」

にこりと、蘭は微笑みかける。横にはコナン。

「そうだね…俺もまさか、あいつら全員一緒になるとは思わなかったけど…でも、姉さん…」

言おうとして、流石に躊躇った。

「何？」

「新一…お兄ちゃんとは上手くやってるの…？」

「―あいつ、もういいんだ…」

「っ…」

やはり、返ってくる答えは…

「それより、今日は私結構早く帰れると思うから…夕飯の準備はしなくても大丈夫よ。じゃあね、コナン君。」

「う、うん…じゃあね。」

蘭は、そのまま職員室へ向けて歩き去って行った。

（ま、じっくりやるしか…ねえよな。）

そうボソリと、呟いた所で探偵団に発見された為、探偵クラブへと連行されたのは言うまでもない。

HR（ホームルーム）（後書き）

春休み中に終わるのでしょうか…？

不審な電話

嫌な事だらけだった。

―蘭には、やはり工藤新一との関係を否定されるし。

それに加えて、やけに灰原の機嫌が悪かった…俺らの話、もしかして聞いてたんじゃ…

―機嫌悪い時は、とにかく扱いづらいんだよな…あいつ。

「はあ…」

今日何回目だろ…溜息。

プルプル…

ん……誰だ……灰原…？

ピッ…

「もしもし？」

『ちよつと、どういつ事？』

「えっ？」

『あなた―江戸川コナンとして、蘭さんに告ったって？』

え…

ええ！？

何の噂だよそれ！？

「な、バーロオ！んな事するわけねえだろ！！」

『…そう、よね…なら、いいわ。ごめんなさいね…変な事言つて。』

「あ、ああ…」

『でも―分かつてるでしょうけど、彼女にそんな感情を植え付けさせたらダメよ。もし…本気で、彼女があなたの事を…愛してしまつたら…』

「わーってるよ…蘭に、組織の手が及ぶ可能性が―さらに高まるって事だろ？心配すんなよ…ちゃんと、管理すつからさ…」

『そう…なら、いいわ。それじゃあ…』

ピッ…

くっそー…本当に、変な一日だぜ…

「コナン君！ご飯よ！」
「あ、はい！」

~~~~~

蘭が食べ終わってから、また、厄介な事を言いやがった…  
「ねえ、コナン君。今度の日曜日、遊園地行かない？」

…うん、って…ダメだダメだ…

「ぼ、僕は…いいよ…」

「そう？…でも、久しぶりに、行きたいな…」

…うつ…反則だろ…その表情…

「で、でも…たまには、いいかな？」

「そう？良かったー…それじゃあ、今度の日曜日！約束だからね」  
「う、うん…」

嬉しそうに、流しへと向かう蘭。

—まさか、このまま…

「コナン君、私…私…本当は、コナン君の事が、好きなの…」  
「ぼ、僕も…」

—んなわけねえだろ！  
そんな事に！なるわけねえって！

…でも、あいつ…凄く機嫌良いし…ま、まさか…

ダメだ！そんな事考えちゃ！

…はあ、疲れた…

寝よ…

## 輝く笑顔

静かに、コナンを起こさないように扉を開く。

小さな寝息を立てて、ベッドに横になっているコナン。

気付いたら、欲する相手は―コナンへと変化していた。  
待ち焦がれていた相手は…ここ数年、戻ってくる気配が無い。

電話越し、メールでの連絡でしか会えない相手―今、どんな事をしているかも分からない相手を、10年も愛し続けてはいられない。

―もう、私には新一は要らない。この子がいれば…私は生きていくから。

『一人に…しないで？』

―私の真意は、これだったのかもしれない。本気で…この子を頼っていたのかもしれない。

『この子を新一だと思っていたのではなくて、本気でこの子を好きになっていたのかもしれない』

…もう、アイツは戻ってこないけど、私は大丈夫なんだと思う。

「蘭…」

…もう…たまに、呼び捨てにしちゃってさ…

—でも、そこまでも可愛く思える。

「ダメ、だ……違う…違う…」

何かしら…寝言にしては、なんだか真面目なような…

「待って…待って…」

―大丈夫だよ。コナン君。  
何処にも行かないであげるから……

―晩、ここに居て、あげるから……  
―ううん。

抱いてて……あげるから。  
―そうしないと……私も、寝れなそうだから……

~~~~~

マンションが崩れるのではないかという程の、大きな奇声を上げた、
高校生探偵。

―大家さんが、本当に怒鳴り込んで来そうだ。

「ら、蘭!？」

「えっ…ふああ…」

いつもより少し早めに起きたコナン。

―起きたら、誰かの寝息がすぐ傍で聞こえると思えば…

口調を元に戻し、コナンは言った。

「ど、どうして!？僕の布団に居るの!？」

「あっ…ごめん、昨日寝れなくて…」

ふっと、天使のような笑みを見せる。

「―コナン君と一緒になら、寝れると思ったんだ。」

「で、でも…もう、僕だって…17なんだよ…？」
顔を真っ赤にしながら、コナンは呟く。

「—ごめんね。私ばかり…本当に、コナン君に甘えてるみたいで…」

ふふっ、と笑って、蘭は布団から出る。

「それじゃあ…朝ご飯、作ってるね。」

「ほ、僕も手伝うよ…」

「ふふっ…ありがとう。」

澱みをまるで感じない、その純粋な彼女の輝く笑顔が—あまりにも切なくて。

「いつも、本当に…ありがとう。」

きゅっと、一回抱き締める蘭の感触が心地良く感じられる中で、俺は聞こえないように舌打ちした。

桜吹雪

「えっと…それじゃあ、江戸川君。」

「―3番です。」

「うん、その通りよ…」

―蘭が、唯一俺を「江戸川君」で呼ぶ時間である。

流石に、授業中までも「コナン君」と呼んでくるわけではない…

けれど、何故だろう。

―「コナン君」と呼ばれる方が、蘭と親密感を感じるのに…「江戸川君」と呼ばれる方が、安心している…

「…えっと、それじゃあ…これは、灰原さん…―えっ？」

蘭が、素っ頓狂な声をあげたので、灰原の席の方を見やると―

「あれっ!？」

「えっ!？」

「マジかよ!？」

―灰原がいない!

前の授業で、軽々と、数学の一番難しい問題を口頭で何も書かずに答えた彼女が―いない!

「えっと…授業開始前にはいたよね？」

「うん、いたよ―途中で、体調が悪くなったのかなあ？」
「そうなら、いいけど……」

蘭が、不安そうな顔をする。

「―それじゃあ、私とコナン君が探してくるよ！」
歩美が、大きく手を挙げた。

「そうね…それじゃあ、学級委員にお願いしようかな。」
「それじゃあ、行こう?」

歩美は、問答無用でコナンの手を引っ張って行く。

「あ、あ…ちよっ…」

しかし、蘭は―一度それを止めて、静かに耳打ちした。

(…お願いね。コナン君…)

―嬉しそうに言う彼女に、今日二度目の切なさを感じた。

~~~~~

舞い続けて、ひらりひらりと堕ち続ける…止まる事無く、不規則に  
…いつまでも、堕ち続ける。

—小さな、美しい花びら達は…消え失せる為に、地へと堕ちて行く。

堕ちなければいいのに。

ずっと、そこにいればいいのに。

—でも、それが私たちにとって…美しい物に見えるのだから、ふざ  
けてる…

こんな景色が見れるのは…この場所だけ。

彼が、あの事件に遭遇した—この場所だけ。

## 桜吹雪（後書き）

ようやく、「あの事件」について―次回、語られる事になります。

それでは、お楽しみに。

想いを変えるモノ

「蘭！蘭っ！」

必死に、小雨の中を走り続けていた。

―いつまで経っても見つからない、彼女。

今流れているニュースが―信じたくない結末を想像させてしまう。

『女子高校生連続殺人事件』

―米花町に、それが現れた―

「くそっ…はあ、はあ…」

―別居中の小五郎にすら、連絡していない。

絶対に、自分で…見つけ出す。

―誰にも心配かけずに、この事件、いや…この不安を解きたい。

滑って、思わずこけてしまいそうになる。

「くっ……」

それでも、コナンは走り続けた。

~~~~~

園子は、多分逃げ切れたと思う。

―だって、こっちが行き止まりの…崖なんだもん。

園子は怪我してる…一人で逃げさせてあげなくちゃいけない。

別れ道で、園子に「後で合流しよう?」なんて言ったから…多分、逃げて逃げて逃げ切ってくれたと思う。

後は、私が…

—死ぬだけ。

この狭い空間じゃ、銃弾は避けられない。
—もう、どうしようもないの。

ははっ…分かってたのにね。
もう…逃げ切れないって。

園子についてけば…園子が死んじゃう。
園子を別れさせれば…私が死んじゃう。

どっちでも…死ぬ運命にあった事、分かってたのに…ね。

—新、—…？

最後に、あなたの声…聞きたいな。

でも…ほら。やっぱり。
今日も…留守電だ。

もう…ダメなんだね。
私…

「おやおや……お嬢ちゃん……こんな所に逃げ込んで 死ぬ覚悟が出来たのかなあ……？」

——うん……そうよ。

いめん……血……

パン……

「ぐあっ…」

えっ…

バタバタ、っと二人同時に倒れる音が、私の耳に入ってきた。

一人は犯人。

そして…

「コナン君っ!？」

「間に合った、んだね…蘭、姉さん…」
「コナン君！」

そんな…このままじゃ…！

「そんな、顔…しない、で？…ほ、ら…綺麗…だ…よ…？」
「えっ…」

「よ、ち…」

―夜桜が舞い散る中、目の前の少年は…意識を失った。

この日から、だった。

私が…コナン君が…好きでたまらなくなったのは。

周りの同級生だった皆は、どんどんと婚約者を手に入れる。
— 少しでも、嫉妬してたのかもしれない。

…でも、一番近くに…コナン君が居た。
大好きな…少年が居た。

— 新一と違って、実在するモノが…私の想いを…変えたのだ。

~~~~~

― そう思った。

彼女を変えたのは…間違いなく、あの事件だ。

…それ以来、彼女は江戸川君に依存していた。

恐らく、江戸川君本人は気付いていないでしょうけど、そんな事は私どころか、吉田さんだって分かってるはず。

― 勿論、そんな事は許されない。

そんな事をして…彼女の危険を増大させて、いいはずがない。

…分かってるんでしょう？

分かっている…分かっている、認めるつもり？

絶対…ダメだから。  
江戸川君…迷っちゃダメよ…

## 消え失せた

「あのなあ…こうやって飛び出したけどよ。」

教室から出て、自分の手を引こうとする歩美に呆れたようにコナンは言った。

「どうせ保健室見に行くだけだろ？」

「……」

「流石にそこに居なかったらお手上げだぜ…灰原の行動範囲なんざ、分かったこっちゃね…わっ…」

しかし、無言で歩美はコナンを引っ張って、廊下を歩いていく。

「ちよっ、ちよっ！止まって！止まって！しかも、そっち保健室じやねぞー！？」

―他のクラスにも聞こえるような声で、コナンは歩美に止まるように促した。

だが、歩美はずっと引っ張っていく。

「えっ…」

そして、歩美は―丁度反対側、階段の前で止まった。

「…ねえ、コナン君。」

いつになく、歩美が―深刻そうに言った。

「…え？」

「ここに来たの…なんでか、分かる？」

「…さあ。」

―あまりにも突拍子な質問に、適当にコナンは返答する。

「…そうだよな。こっぴうの、鈍感だもんね…コナン君。」  
(鈍感って…)

さらに、歩美の口元が引き締まる。

「コナン君―」

蘭お姉さんの事、好きでしょ？

「…え。」

「…知ってる？」

少し間を空けて、歩美は続けた。

「え……」

「―もう、クラス中の噂なんだよ？コナン君と…蘭お姉さん、付き合ってるって…」

「っ！？」

コナンは驚く。勝手に話を進展させられていた事に…

「コナン君が居ない時は、誰も言わないようにしてるみたいだけど

……」

「……でも、どうして…」

そこだった。どうして、そんなデマが流れたのだろうか？

「―蘭お姉さん…今日、先生達に誘われてたの。日曜日に食事に行かないか、って……でも、蘭お姉さん…『知り合いと遊園地に行く』って言って…断ったんだって。」

「ちよっと待て。知り合いだったら…まだ分からないだろ。俺じゃなくて、園子かも……」

「『園子』じゃなくて『園子お姉さん』でしょ……」

歩美の突っ込みで、話が一旦途切れる。

「わ、悪い悪い……」

「もう……」

「―それで？どうして分かったんだ？」

「…その後、メール打ってたってー園子お姉さんに、『ごめんね。日曜日、コナン君と遊園地に行くから…その美味しい、レストラン行くの、また、来週にしてくれないかな?』って…」  
「ーそれを…まさか。」

コナンの言葉に、歩美は小さく頷いた。

「…ねえ。」

「え?」

そして、歩美は強く言う。

「それで、どうなの?」

「え…」

「ーコナン君は…蘭お姉さんの事好きなんですよ?」

「っ…」

ーコナンは言葉に詰まる。

「…答えなよ。」

「………」

そして、歩美は―誰に聞こえてようがお構い無しに叫んだ。

「答えなよ!!どうして迷ってるの!？」

さらに、コナンの肩を掴む。

「10年前から、ずっとそうだったよね!??ずっと……ずっと、コナン君は蘭お姉さんの事が好きだったんでしょ!??」  
「違っ……俺は、俺は……」

『工藤新一だから』

―言えるはず無い言葉は、頭を鋭く過ぎっていく。

「……」  
「……そうだね。言えないんだよね……」

歩美は、ふっと笑顔を見せた。

「―だったら、もう……断りなよ。」  
「……」  
「そうすれば……蘭お姉さんも困らないよ。」

歩美の言ってる事が、正論だと、コナンの思考回路ならば―容易に理解できたはずだ。

だが、心は―逆を示す。

「そうでしょ…コナ―」

「…ふざけんな―!」

―怒鳴り声。

「お前に…お前に蘭の何が分かんだよ!」

「えっ…」

「どんだけ…どんだけ待ってると思ってんだ!…あんな蘭見て、耐えられるわけ…ねえだろが―」

パン

—コナンの叫び声なんかより、遥かに響く音。

「…頭冷やしなさいよ。大馬鹿。」

—鋭い口調が、浴びせられる。

「…何だよ。お前。」

「—何も分かってないのはあんたでしょう？その行為が…どれだけ、彼女を危険に曝す事になるか…分かってすらいない。認められるわけも無い行為…それが、何故認められないか分かってないあなたを…野放しにしておく程、私は馬鹿じゃないから…」

—歩美には話の構造すら理解出来なかった。

「…ら—」

「蘭さんの事を精神的に追い詰める事…それは避けられないのよ。『それ』と、彼女の命を…あなたは、天秤にかけるって言うの？」

「……」

「まさか…あなたは、『それ』の方が避けたい事…避けるべき事だと思ってるんじゃないでしょうね。」

コナンも、言葉が出なくなった。  
―これ以上は、我儘でしかない。

「…悪い。」

そして、コナンは教室へ戻り始めた。

「…哀…ちゃん？」

「…さあ、吉田さん。戻りましょう？ 私達も…」

灰原は、すたすたと教室へと歩を進める。  
「待つて」と言つて、歩美も追い掛けた。

「…あら？」

しかし、異変に気付く。

―教室前で、コナンが青褪めていた。

「どうしたの？江戸川く……っ！！」

教室の中の異変に、灰原も言葉が出なくなった。

荒らされた教室。そして―

「元太君！光彦君！！」

歩美が、急いで二人の元に駆け寄る。

―殴り倒されていた。

「…大丈夫だ。気絶してるだけ…それより。」

―鋭く、灰原を睨んだ。

「灰原！」

「…ごめんなさい。流石に…抜け出したのは、謝るわ。ここまで展開が速いなんて…予想してなかったから…」

「え…えっ…？」

まだ、流れを掴めない歩美に――コナンは告げた。

「蘭姉さんが…このクラスの奴らに…攫われたんだよ。」

「っ！！」

## 惨状と出撃

「脱出経路は―これで間違いないでしょう。」

コナンは、大体の事情を教師に話し、指示を仰ぐ。

「一応…僕は待機という形で構いませんか？」

「ああ…そうだな。無駄に動かれても困るし、うろつろされても邪魔だ…取り敢えず、警察を呼んでくるから、事情説明までは大人しく教室で待つてなさい。」

「はい…ありがとうございます。」

そして、コナンは―大量の物が飛散する教室へと戻る。

元太と光彦は、どちらも保健室へと運ばれた。

かなり歩美も動揺している…と言っても、長い間少年探偵団として様々な経験をした結果、こういう状況でもある程度落ち着いてはいられた。

「ねえ…コナン君…」

―そして、こういう時は…状況を把握する事。

「―ああ、全部話すけど…それより。」

灰原の方を向くと、灰原は首を振った。

「全然…全員の机の中見たけど、何も無かったわ。」

「そうか…」

コナンは、手帳を取り出して、概要を歩美に説明した。

「まず…蘭姉さんを攫ったのは、間違いなくこのクラスのメンバー…この学校、結構警備は厳しいし…外部犯って線はまず無い。」  
「うん…」

「で―蘭をまずどちらかの方法で気絶させる…空手部の女子―佳奈が不意打ちしたか、スタンガンで気絶させたか…まあ前者につきちゃ、確実に誰とは言いい切れねえし、外傷を見なきゃどっちかはわかんねえけど…とにかく、何らかの方法で隙を突いて、蘭を気絶させ、そして…」

コナンはドアの外を向いた。

「―あそこにある男子トイレへと連れ込み、ロープで脱出…」  
「―待つて。」

コナンの推理を、灰原が止める。

「いくらなんでも…この大人数を、ロープで降ろしてたら…」  
「―ああ。お前知らねえだろうけど…男子トイレって、4つ窓あるんだぜ？」

「―え？」

歩美と灰原が驚く。

「まあ結構大きいし、換気って事で仕方ないんだろうけど……しかも、ロープ使うつたつたってこの高さ……5mあるかないかだ。一人30秒程度あれば降りれるよ……上のロープは固定しておいて、最後に下からロープを引っ張って、固定用の大きなピンかなんか毎引き抜けば……ちよつと綱渡りだけど、十分脱出できる。」

「でも、その後は？」

「うーん……」

少しの沈黙が流れた後、コナンは言った。

「分からないの？江戸川君……」

「そこなんだけどさあ……まだ確証が持てねえんだ……けれど、一つ分かってるのは――裏門の警備員が、この時間帯は居ないって事……」

――すつと、コナンは灰原に一枚の紙をちらりと見せる。

『流れのままに』

足元で、灰原も丸を作る。

「それでさ…歩美ちゃん。」  
「え？」

「…悪いんだけど、保健室で…元太と光―」  
「ダメ!!」

小さく、コナンは舌打ちする。

「だって…二人で犯人の場所に行って、犯人を捕まえるつもりでしょ!？」

(…やっぱバレてたか)

「歩美も―」  
「待つて。」

灰原が、止める。

「江戸川君が…犯人の場所が分かったなんて、一言も言ってないじゃない？」

「そ、それはそうだけど…」

小さく、灰原がウィンクする。

「―心配しないで。場所を突き止めて、警察を呼ぶだけよ……彼の予想を、確証に変えて…ね。」  
「……」

―そして、決め手を放った。

「それに…あなたにだって大切な役目があるわ。」

「元太君と…光彦君のところに居るの？」

灰原は首を振る。

「それもそうだけど…東尾さんよ。確か今日、病院に行ってから来るから—そろそろじゃないかしら？」

「あつ…そうだね。」

「—彼女に、今何が起こってるか説明して、待機させてあげるのも…あなたの役目よね？」

「う、うん…分かった。」

ほつと、コナンは一息つくと、念を押した。

「いいか…歩美ちゃん。もし、何かしらの方法で蘭を連れ去った奴らから携帯に電話が来たり、直接そいつらがここに来たら…焦らず、教師に指示を仰いだ方が良く…何かあつたら、連絡してくれ。頼むぜ！」

「うん！分かった！」

歩美は、走り去る灰原とコナンに、小さく手を振った。

~~~~~

「―ふう…凌ぎきつたぜ…」

―歩美に、他の親友が…こんな事に加担していたという事など、分からせたくは無かった。

「ったく…あんな所で、時間潰して…ま、吉田さんを付いて来ない様にするにはこうするしかないけど…で。」

灰原は尋ねる。

「本当に分かったんでしょ…居場所。」

「ああ…30数人を入れておくスペースなんて、この辺りには…一箇所しかねえよ。そもそも、あそこ以外で、大人達に怪しまれない場所は…存在しねえ。そう、この学校の裏道を伝って―この倉庫だけだ。」

―行き止まりにある、結構大きめの、倉庫。

「確かに…ほとんど人とすれ違わなかったわね。でも、流石に―」
「いや…蘭を運搬するのは、車だ。」
「車？」

「恐らく車も中に入れたんだろうけど…ま、流石にこのタイヤの跡は見逃さないぜ？」

―にっと笑って、僅かに砂の部分に残るタイヤの跡を指差す。

「なるほど…結構、可能性は高そうね。」

「ああ…でも、恐らく俺らが今―ここに飛び込んでいても、捕まっちゃう…が、逆にこの立地は警察を呼べば蘭を人質に立て籠もるつもりだろう…から、まずは隠れて様子を探った方がいいな。」

―倉庫の陰に、コナンと灰原は隠れた。

「それより…」

「―いや、俺も悪い。さっきはいきなり怒鳴ったりしちゃって…
こういう事になるんだったら、灰原は追っけなかったよ…どうせ戻って来るんだし。でも、蘭の事を勘付かれてたって事には気付いてなかったんだ。俺の失態だよ。」

「……」

—小さく、「ごめん」と呟く。

—その時だった。

『おうおう…この女だ。この女…この前、やべえ所をウイスキーが見られたってのは……そうですよ？兄貴…』

『…ああ。こいつに間違いねえ……ご苦労だったな……手際は悪かったが。』

「…!!」「」

予想もしない二人の会話が、聞こえてこようとは—思いもしなかった。

追跡開始

（嘘…！）

（マジかよ…）

コナンも灰原も、信じられなかった。その倉庫の中に居るのが…ジ
ンとウォツカだとは。

『悪かったわね。こっちも怪しまれないようにするので精一杯なの
よ…それとも、プランの時間よりも5分早く持って来た事に、問題
があつたのかしら？』

（…緑原さんね。）

― 緑原博美。柔道部に所属する、運動センス抜群の少女。

頭も結構良いが、そのきつめな性格から、一部の女子には嫌われて
いた。

…だが、逆にそういう性格を男子は好む人が多かった。

（…アイツ、企業のトップの娘さんだろ？）

（ええ…でも、それだからジンが選んだってわけ？）

（顔写真が出てっからな…見分けるのは容易だろうし、その企業…
裏社会に結構手が回ってるらしい。）

前に、工藤新一が扱った事件にも、僅かに関わっていたのだ。
マフィア絡みの…大きな事件に。

（…取り敢えず、しばらくここで様子を窺いましょう？）

（そうだな…）

『それより、兄貴。』

『どうした？ ウオッカ…』

ウオッカが、ジンに尋ねた。

『例の件…決着、ついたんすか？』

『いや…まだだ。ただ、明日にでも…こいつを連れて行く予定だ。』

（こいつ…？）

―話の趣旨が、まるで掴めない二人。

（…『こいつ』ってのは…もしかして、緑原さんの事じゃないかしら？）

（成る程…でも、だとしたら…何の件なんだ？）

（…そこまでは…）

二人が考えていると―急に、ウオッカの声が低くなった。

『で、どうしやす？ この女…』

『殺す…わけにはいかな。ただ、見られたのは確かだ…このままあの方の所までお持ち帰りだ。』

（っ！）

―動けなくなる二人。

（どうするのよ…工藤君！）

焦って、灰原が小さな声でコナンに尋ねる。

だが、コナンは微動だにしない。

（工藤君！何して…）（灰原。

覚悟を決めた—そんな表情でコナンは立ち上がった。

（…待ってる！灰原！）

（え、ちよっ…ちよっと！）

そして、コナンは一気に駆け出した。

（工藤君！）

脱出

—中の様子は相変わらずで。少し騒がしい中で、ジンとウォッカと緑原さんが会話してるみたい。

そろそろ、警察も来るんじゃないかしら？って思ってから15分ぐらいが経ちそう。

…でもって、工藤君は戻ってこない。

何をしているの？一体…
それに、ここからどうやって彼らは抜け出すの？

…疑問が、尽きない。

…車で逃走するわけには、いかないでしょうしね。
恐らく、ここまで小型の車で蘭さんを運搬して、残りの乗れない生

徒は歩いて来た…

とすれば、この逃げ場の無い倉庫から、無理矢理に抜け出すのは厳しい…

…警察に、連絡しようかしら。でも、ジンが何も策を練ってないなんて思えない…

…まだ、危険。工藤君の連絡を…待つしかない。

…早くしなさいよ。工藤君。
あなたが遅ければ…蘭さんの身に、何が及ぶか…分からないんだから。

「—何してるのかしら？」

っ！

「ベル、モット……」

くっ…

「―身構える必要はないわ…Sherry。別にあなたを殺りにき
たわけじゃないから…」

「信じられないわね。いつもみたいに殺気出して…何時でも撃つ用
意は出来たんでしょ？」

「そうね。」

ほら…やっぱり。

「とはいえ、流石にここで撃つのはリスクが高すぎるわ…時計型麻
酔銃とやらで私が眠らされれば、計画は完全な失敗…あなただって
持っているでしょう？Sherry…」

…バレてる。

「だから、あなたにはここでこの舞台を降りてもらっただけにしてお
くわ…」

…え…？

「今回の私は、ただの航空管制官―」
…っ！

『OKよ。付近に障害物なし、人影…』

まさか！！

「Sherry。今回は助かったわね…」 『プシュッ』

催眠薬っ…ん…

くくくくくくくくくく

ジンの指示と同時に、一斉に学生服を着た者達と、ジンとウォッカが小型飛行機へと乗り込む。

「ウォッカ。出発しろ。」

「へい…兄貴。」

飛行機は、ゆっくりと加速を始め、飛び立った。

「…それにしても、兄貴。」

「どうした？ウォッカ…」

自動操縦に切り替えると、ウォッカは緑原から受け取った一枚の紙切れを取り出す。

「これ…妙にシェリーに似てやすね。」

― 2年B組のクラス名簿、それも写真入りである。

「ああ…そうだな。」
「殺りますかね？」

小さく、ジンは口元に冷笑を浮かべた。

「…もしかするとだが。」
「え？」

『殺した奴の顔なんざ、一々覚えちゃいねえよ。』

~~~~~  
『何者だ…お前。』

『…探偵さ。』

~~~~~

―未だに『行方不明』の高校生探偵―
―あの場所で会った学生服の探偵―
―その場で目撃されたシェリー―

「…そう、シェリーが幼児化した姿がこいつだと考えるならば……
高校生探偵、工藤新一は…こいつかもしれないなあ……」

一人の男の写真を指差した。

~~~~~

―計画通り。誤算は少しあったけど…な。

伸縮サスペンダーで、倉庫の上まで登って隠れておいて…後は最後尾の奴が乗り込む前に下りてきて、乗り込んだ瞬間に自分も飛び乗って、最後尾の奴に背後から麻醉銃。

どうせウォッカとジンが操縦席、生徒達が客席だろうって分かっていたから…後はマスクをして、催眠ガス流すだけだったけどな。

…まあ、まさか見張りのベルモットに灰原が眠らされるなんて、考えてなかったけどな。

でも、ベルモットはそのまま帰っちゃったし…灰原はこの後、発見されんだろ。

それより…今は蘭だ。幸運にも客席には居たから、ここまで連れて来た…

そして、後は窓を無理矢理壊して、小型のパラグライダーで脱出するだけだ。

…蘭を抱えながら、か。

そんなに重くはねえ…けれど。固定用のロープはある。

…後は、それで何とかなるか…どうか。

高度はまだかなり低い…今しかねえ！

やあっ！

『パリン』

『お、おい、何の音だ！』

くそっ…早いな！でも、こっちはもう…準備完了だ！

うおおおお！！

## 告白

「…あ、…れ？」

目を開くと、そこには確かに…

「蘭姉さんっ！」

コナンは強く蘭に抱きつく。

「コ、コナン君…」

「良かった、良かったっ…！」

ぎゅっと抱き締められると、蘭も強くコナンを抱いた。

「ごめんっ…迷惑、掛けてっ…」

—思わず涙が一粒ずつ零れ落ちていく。

広い砂辺に、コナンは眠る蘭と共に降り立った。

蘭の呼吸が安定していた事にほっとして、ゆっくりしていたのか、辺りにはペットボトルも転がっている。

「…ごめんね。助けに行くのが遅れて…」

「コナン君…」

蘭は涙を止め、コナンを直視する。

（言う時…かな。）「ねえ、コナン君…？」

―止まった筈の涙が滲み出て、右目が再び潤む。

「わた、し…」

「―ダメだよ。」

コナンが遮った。

「…え…？」

「―ダメだよ。蘭姉さん…」

俯いたまま、コナンは蘭から離れる。

「…俺じゃダメなんだ。蘭姉さんの事…まだ新一ちゃん、待ってるから。」

「……」

「だから、ダメなんだよ。俺じゃ―」

「違っつー!」

蘭は叫ぶ。

「…え…？」

「―私なの。変わったのは…もうダメなの。私。新一より…新一を

待つ事より……」

10年間。いつも一緒だった。

何度もお互いに助けられて、何度もお互いに傷つき合いながら、何度も慰めあった。

養子だったこの少年も、徐々に成長して……新一と姿が重なった。

——好きなのだ。その姿が。

何度も守ってくれて、何度も助けてくれたその少年が……その姿が、好きなのだ。

その思いは止められない。どうやっても。

「もう、無理……だよ……」

どうやっても。

「我慢できないの……私……」

『待つのは嫌いじゃない』のは、『待ち続ければ会えた時の嬉しさが何倍にも増すから』であり、それは即ち『戻って来なかった時、もしくは戻って来ないと分かった時の悲しさが何倍にも増す』という事も同時に指している。けれど、もはや新一と会う事なんて、叶う筈が無い。いや……叶うのは何時になる事なのか。

——そして、もう耐えられない。目の前の少年の姿に。これ以上、耐え続ける事が出来ない。

「コナン君は…新一の代わりなんかじゃない。私が一番好きな…人なの。新一よりも…新一よりも、大好きな…たった一人の、男の子。もう…ダメなの。私は…」

その場に、蘭は泣き崩れた。

「…私は、好きだよ…っ？コナン、君……」

その言葉は、彼女の精一杯の告白だった。

毎日神経をすり減らしているのだ。新一が帰って来ないか、楽しみにすると同時に、帰って来ないと僅かに寂しさが増していく…それを、明日はきつと会えるという期待で、押し殺す…

そんな作業を、心の奥底で毎日続けていたのだ。そう、彼女はそれを滅多に周りには見せない。その精神的な辛さを、決して周りには見せない。

—それを理解していたから。コナンは、その気持ちを理解する事ができた。

もはや限界に辿り着き…感情が、コナンに向いた。そう理解した。

「でも、ね…蘭姉さん。」

それでも、断らなくてはならない。

―もし、ここで蘭と付き合い始めれば…蘭が組織に関わる可能性が大きく上昇する。

しかし、コナンの口から発せられる言葉は、無意識の内に闇へと傾いた。

「…一つ言えなかった事があるんだ。」

「え？」

彼が選んだ決断は―

「―新一お兄ちゃん、もうこの世には居ないんだ。」

―工藤新一という存在を彼女から消去して―

「…だから、守るよ。これから僕が…蘭姉さんの事。」

—江戸川コナンという存在が、毛利蘭を守るといふ事。

「守るから…絶対に…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1695r/>

---

失恋か、初恋か？

2011年10月8日07時08分発行